

遅しき「伝統」—*Hand Stories* から—

伊藤 真紀

ITO Maki

2012年の4月から翌年の3月まで勤務先の「在外研究」という制度を利用して一年弱の間、アメリカ（ニューヨーク）に滞在した。

期間中、現地での資料調査もさることながら、なるべく劇場に足を運ぶつもりでいたが、海外での長期滞在は初めての経験であり、思いのほか現地の生活に慣れるのに時間がかかった。

したがって日本にいる時と同じように演劇やダンスを見られるようになったのは夏頃になってからだったかもしれない。

ご存知の方も多いと思うが、ニューヨークでは、毎年リンカーン・センター・フェスティバルが開催され、7月から8月にかけて世界各地から選りすぐりのカンパニーがやってくる。この年はスコットランド国立劇場による「マクベス」の公演があり、アラン・カミング主演のシェイクスピア作品に注目が集まっていたが、ほかにもパリオペラ座バレエ団がジゼルを含め3作品を上演するなど、約一ヶ月を通して見応えのあるプログラムが並んだ。

これらの公演のなかで最も感銘を受けたのは、アイルランドのトム・マーフィーの戯曲三作品の上演であったが、そのほかにも、もう一つ印象深いものがあった。それは中国のYeung Faiによる、一人遣いの手指人形劇「ハンドストーリーズ」である。

その後、2013年にはイギリス、ロンドンのインターナショナル・マイム・フェスティバルでも上演されたようだが、この作品は、伝統的な人形遣いの家の四代目に生まれた若者が、近現代の中国の政治に翻弄されながら、いかに「伝統」の人形劇を上演し続けてきたか、というバックステージものでもある。

主演者自身が、中国を出て、香港、ブラジル、ヨーロッパの都市の路地で人形劇を演じ続けてきた様子を演じた。

たしか人形劇の冒頭であったと思うが、祖父の人形と父の人形などが並んで登場して、この一人使いの人形劇が父祖から伝わったものであることが伝えられ、また、劇中劇として伝統的な演目も上演された。

人形劇ということもあって、劇場には子供たちも観に来ていたが、ドキリとするお色気シーンも含まれており、むしろ大人が楽しめる人形劇であった。

「ハンドストーリーズ」を観て、あらためて考えさせられたのは、演劇の「伝統」を保護する、という考え方であった。

この人形劇は、本来であれば自国で保護されるべき芸術であろうが、現実にはそのように運ばなかった。そのため「伝統」的な技法の多くの部分が失われてしまったであろうことを思うと惜しい。

しかし、自国がダメならば、海外へ持ち出し、自らの状況を劇化しながら新しいメディアも駆使しつつ演じ続けるという、Yeung Faiの姿勢は、いかにも逞しいと感じた。

さまざまな方法を工夫しながら、自分の手に伝えられた「芸」に執着して生き残ろうとする姿勢は、本来「芸」の持つエネルギーに満ちあふれていたように思う。

(received Feb. 2016)